



01.柔らかな線を描くために柔らかなタッチのものを選ぶという筆。02.アクリル絵具はすぐに定着してくれるので性格的に合っている画材。03.04.最初は水だけをキャンパスに染み渡らせていく。05.06.キャンパスが乾く前にアクリル絵具で描き、染み込ませていきます。

「以前は今と違うスタイルでした。『絵画の新しい方法論を生み出そう』としていたというか。理屈と作業という感じで精神的に辛いこともありました。それで一時、作品を発表することから遠ざかっていたのですが、本当に自分が興味のあることを自問自答し導き出された答えが『色』。自分が気持ちいいと思える色を出す今の技法にたどり着いてからは本当に描くのが楽し

まるとスポーツのよう
キャンパスに向かい描いている間、井桁さんはとにかく動く。広いスペースを使って大胆に、時に繊細に動いている姿はなんだかスポーツのようです。「遠くから見ても印象的で、近寄って見ても発見があるような作品を描きたいので、制作途中ではできるだけ離れて見たい。だからある程度広い空間が必要なんです。今日はいつも指導しているアトリエで描いています。特に夏は屋外で描くこともあります。周囲の花などいろいろな色にも影響を受けて気持ちよく作品を描いていくことができるのが新しい発見。描く前は描きたい線のストロークをウォーミングアップするなど心と体を慣らしてから始めます。」と井桁さんの描いている姿勢もなんだかアスリートのような清々しさが感じられます。

「展示会のテーマでもある花は自分にとって大切なモチーフの一つ。南国の鮮やかな花ではなく、美しさの中に北海道だからこそある生命の凛としたものを表現してみたいと思っています。今回は自分にとってもうブランク後の再始動の意味もあります。新しい自分を多くの人に見てもらいたいですね。」

芸術の森で再始動
井桁さんの新しいイメージをこの冬、楽しみにしています。
「新しいスタイルになって、以前の作品を知っている人たちからは『絵が優しくなった』といわれることもあるという井桁さん。素直な感動をそのまま写し取ったような作品はそんな制作過程の心と体の躍動感楽しさを私たちに感じさせてくれました。」
「新しいスタイルになって、以前の作品を知っている人たちからは『絵が優しくなった』といわれることもあるという井桁さん。素直な感動をそのまま写し取ったような作品はそんな制作過程の心と体の躍動感楽しさを私たちに感じさせてくれました。」



井桁雅臣
(1964年札幌市生まれ、札幌市在住)
[VOCA展2003 現代美術の展望～新しい平面の作家たち] (上野の森美術館)での発表後、キャンパスに絵の具を染み込ませる手法によって、鮮やかで透明感のある色彩が、作者の描く行為をダイレクトに伝えながら画面上に舞う華やかな作品を制作。



《君と僕とあの光のこと》2008年 アクリル、キャンパス



atelier file
02
躍動する心と体を封じ込めた作家の第2章
井桁雅臣
Masaomi Igeta

今回のアトリエはいつも北海道造形美術学院の教室として多くの学生が学ぶ場所。夏場は外で制作することも。「外での制作はとても気持ちがいいですよ。洗濯物を乾かす感覚です。」と井桁さんが語るように太陽の光の下だととんとん乾いてくるので2点から3点同時に制作している。